

在日の問いかけに学生たちはどう答えたか？

池野高理

一．学外講師と学生たち

私のゼミでは、「活字離れ」と嘆かれて久しい学生たちに読書の習慣をつけてもらうこと、学ぶということは自分の具体的な日常体験に引き付けて問題を考えることであると意識してもらうこと、そして、そうした作業のなかから言葉の力（漢字力も含む）をつけることを狙って、毎月、私が指定する課題図書を読んで自分の日常体験を踏まえたレポートを書くことと、個人新聞（通信）として自分の日常を具体的に描くことを課題として提出させている。そして講義（保険論）では、「保険論」とは「保険(商品)」を「論」ずるという通俗的な観念から解放すること、逆に、どうしてこの世の中には保険(商品)が数多くあり、しかもそれが人々の生活の中にあたかも不可欠なものとして組み込まれているのか——日本の生命保険の世帯加入率は世界一の普及率！——を考えることで、現代社会のありようそのものを点検することを主要な課題としている。

こうした私の姿勢から、学外で現在の社会のありように疑義を抱きながら自分の生き方を賭けている人たちを学生たちにも知ってもらうことで、これまでの自分の生き方が如何に常識に囚われていたのか¹⁾、じつは〈もうひとつの生き方〉があるのだ、ということを実感してもらおうと学外講師を毎年お願いしている。

以下に示すのは、〇二年度にお願いした学外講師のひとり、パン・チョンジャさんの講演記録（第二節）、学生たちのその感想とそれに関連するレポート（第三節）、そして「拉致」問題についてのゼミでの討論の紹介（第四節）である。

パンさんの講演（五月二八日）はゼミと講義でお願いしたが、本稿で示すのは後者でのものである。この講演のテープを起こしてくれた受講生のK君に改めて感謝したい。また、私のゼミでは毎回クジによって当日の記録係が決められるが、当日の二回

1) これは何も学生たちだけの問題ではない。教員である私自身の問題でもある。これについては『技術と人間』誌に私が連載中の「現代書生かたぎ」（同誌 03年6月号）で触れているので参照されたい。

生のゼミでの講演についてはM君による次のような記録（まとめと感想）がある。本稿ではゼミでのパンさんの講演を直接示すことができないが、この記録によってその概略が窺えるはずである――

5月28日ゼミ

出席者16名 記録者・M

内容：方^{パン・チョンジャ}清子さん講演

在日朝鮮人の人は意外と身近に存在している
 あまり気づかれていないだけ
 名前というものは大切にしなければならない
 外国人は犯罪予備軍だと思われている
 最近までは外国人は年金を受ける権利はなかった
 国籍条項について（公務員試験のこと）
 第二次世界大戦について
 差別について（いじめ、入居差別などなど etc.）
 学校で教育を受けることはできない
 在日朝鮮人の歴史について
 1910年日韓併合，皇民化
 年間15000人ぐらいの人が帰化している
 日韓条約について

感想：在日朝鮮人の人が50万人もいるとは知らなかった。僕も今まで外国人と言え
 ば犯罪を犯しそうという考えが多少なりともあったので、方^{パン}さんには悪いなと
 感じました。公務員試験が受けられない、年金ももらえないなどの差別が一般
 的に行なわれていることを知らず、そういう差別を受けていると聞いて、日本
 人が情けなく思えました。日本人は自分勝手に他国の人を受け入れようとしな
 い傾向が強い。そこのところをもっと外国の人を見習って変えていくべきだ。

二. パン・チョンジャさん講演

私は、在日朝鮮人です。日本で生まれましたので、「二世」です。親の時代に日本に
 来ました。私たちの場合は「一世」「二世」「三世」という言い方をしますけども、
 朝鮮から来た人は、「一世」と言います。そして私たちのように、その親から生まれ
 た人を「二世」と言います。たとえば、父親は朝鮮から渡ってきて、母親はここ日本
 で生まれた場合は「一・五世」という言い方をします。今は「六世」くらいまでいる
 らしいです。それくらい、解放後五十年過ぎていますから、日本に長く根づいてきた

ということなんですけど、そのぶん、民族性が希薄になってきているというのは確かですね。

私は、在日朝鮮人ということでさまざまな制度的な差別を受けて、さまざまな権利から除外され、非常に無権利状態で日本の中を生きてきました。さっきのゼミで縷々そういう話をしまして、最後の質問のときに、何故国へ帰らないのですか？ とか、そういう質問も出たりしたんですけども、なかなか一度話ただけでは私たちの置かれている状況というのは分かりにくいかなと思うんですけども。

ところで、みなさんのなかで在日の友だちがいますか？——教室十五名のうち、ひとりの学生が挙手する——ひとり、ですね。そういう人がいらっしゃったら、ある程度状況というものを分かっているかなと思うんですけども、でも、みなさんも知らない間にじつは在日の友だちに会っているのかもしれないよ。相手が「朝鮮人」と気づいていないだけで、本当は出会っているのかもしれないよ。というのは、在日の人たちで本名を使って生活をしている人は本当に少ないんです。なかなか本名を使って生きにくい日本の社会の仕組みが現実にあるので、すれ違っていても気づかない場合もあるのかなあと思うんですけども。実際に在日の人たちのなかにも、帰化あるいは国際結婚によって、日本国籍を取得する場合も増えているんですね。そういう事情があって、いま、在日朝鮮・韓国人は五十数万人います。

外国人全体は百万人ぐらいですから、およそ半数が在日朝鮮・韓国人、朝鮮半島にルーツを置く人たちです。解放の年、一九四五年、みなさんにとっては「終戦」、あるいは「敗戦」であると思いますが、私たちにとっては「解放」と言うんですね。解放後当時には（当時は植民地時代のために日本国籍）二百四十万人の同胞がいて、多くの人がある直後に国へ帰ったりだとか、帰国船に乗って北に帰ったんですけども、最終的に六十万人が残って、ずーっと代を継いできたんです。この何年間は急激に帰化が増えたりだとか、国際結婚が増えたりなどで、五十数万人になっています。

この数は《多い》と言えらると思います。私たちは参政権もありません。さまざまな社会的制度からも除外されています。みなさんは、いま、就職で苦労されていると思いますけど、さまざまな就職差別もあります。何か不満を言うと、「朝鮮へ帰れ！」って言われる状況です。それと、外登証〔外国人登録証〕を持たされて、それを持っていないと「不携帯」罪で処罰を受けます。それに、五年ごとに切り換えをしないといけない。指紋押捺制度は何年か前に全廃されましたけども、そういったこともさせられて、本当に無権利状態にあるということを見ると、二世、三世、四世とちょっと帰化が進んでいだろうというふうに思われます。たぶん、よその国だったら、そうでしょう。にもかかわらず、日本において、差別やいろんな制度において困難な状況

下、多くの人が在日として自分たちのルーツにこだわり、生き続けてきた。こう考えると、五十数万人というのは、私は、すごく多いなあと思うんですね。

私はその理由のひとつとしては、民族を否定される、つまり、名前を名乗ることができない、あるいは教育を受けることができない、否定される状況のなかで、あえてそのことで闘う、そういった差別状況と社会の不条理に対して、帰化することが屈することじゃないのかという葛藤があって、むしろ、こだわり続ける、朝鮮籍、あるいは、朝鮮民族の一員であるということにこだわりがあって生き続けることが、今日の少なくない在日同胞、多くの人たちが民族にこだわって生きているということの根があると言えらると思います。

いま在日の話をしてきたんですけども、では次に、私がいま取り組んでいる「従軍慰安婦」問題について述べたいと思います。が、その「慰安婦」問題に入る前に、戦後補償問題について少し説明しておかなくてはなりません。この戦後補償問題というのは、言葉はよく聞いたことがあると思うんですけども、日本にとって戦後補償問題というのは、日本のアジア太平洋戦争における日本の戦争責任をどうとるのか、という問題です。アジア太平洋戦争を起こしたのは、日本なわけですね。日本が戦争を起こしてアジアの国々に対して侵略した、と。台湾・朝鮮に対して植民地支配をした、そういった経過があります。そういったことに対して、本来ならば、日本はこれらの被害国に対して何らかの賠償なり・責任をとらなくちゃいけなかったんですけども、それをキチンとしてこなかったゆえに、今もって戦後補償というのが日本の肩に重くのしかかっているということですよ。

このことは五十年以上も経ってることだし、もう遠い過去のことだから、いつまでもそんなことを言ってどうするの？ という意見もあるかもしれません。また、世代を経て私たちのおじいちゃん・おばあちゃんの時代のことだから、もう私たちには関係ないよ、って思う方もいるかもしれません。ですけれども、日本の戦争責任問題というのは過去に済んだ話っていうのではなく、加害者であるほうにとってはもう忘れたい昔のことかもしれませんが、被害者であるアジアの人々にとってはいまだに重い傷を負って生きている、忘れられないことであり、アジアの国の人々はこういったことを歴史として学び続けているわけですね。とすると、何年か後にみなさんが海外の人たちに、またアジアの人たちに出会ったときに、この人たちは日本がかつてやったことをキチンと学んで知っているにも関わらず、みなさんがもし、それって何のこと？ 何言ってるかよく分からんな、っていうことでは、アジアにおける平和的な関係だとか、友好とかいうことが成り立つのでしょうか？ そういう意味で、戦後補償ということをやっぱりみなさんの世代であっても考えていってほしいなあ、っていうふうに思

います。

それで、たとえば、さっき言った在日の問題でもね、日本の戦後処理のひとつだと思っただけです。在日って言うのは、結局、強制連行、あるいは土地を奪われて食料も奪われて朝鮮で生きていくことができなくなって、日本に渡ってきた人たちがほとんどなんですね。そういう人たちの子孫が在日なんですけど、そんなふうになるときに、その人たちに対していまだにさまざまな差別があったり抑圧があったりするっていうのは、日本が戦後処理をきちんと行っていない、歴史教育をきちっとしたうえで、私たちの存在を明らかにしたうえで、私たちの処遇についてきちっとしてこなかったことの結果であり、さまざまな問題が残されているという意味では、在日も戦後処理問題の一つだと思います。

それで、戦後責任問題をひもといていくうえで、一つの例としてドイツのことを少し話したいと思います。ドイツでは戦争が終わったあとニュルンベルク裁判が行なわれましたね。それは、外国人による他者の裁きですね。ニュルンベルク裁判によってドイツの戦争犯罪は裁かれました。同じように日本も東京裁判において、東京裁判というのは連合国＝アメリカをもって日本を裁いたんですけども、戦争犯罪はこれでいったんは裁かれました。

ところが、ドイツはそれが終わった後も、ドイツはドイツとしてナチスの犯罪に加担した人たちを訴追調査をし続けている。犯人を見つけて処罰するというのを、ずーとやってきました。いままでに八万人が裁判にかけられて、七千人が有罪になったと言われてます。それと同時に、被害の対象となった人たちに対して補償をずっと続けています。それは、今後、将来的なものも含めて千二百億マルクとも言われています。1マルクが六十五円なので、まあ計算してもらったらいいんですけども、こんなふうに戦後ドイツは自分たちが行なった加害者の歴史を克服するために、かつてのドイツと今のドイツは違うんだよ、ということを周辺国の人たちに認めてもらって、ヨーロッパの国のなかでドイツが生きていくためにさまざまな代償を払わなければならなかったんですね。その代償というのが、結局、戦後補償をしつづけていくってことだったんですね。

また、国民に対しての意識形成ということで、学校教育だとか資料館を建てたりだとか、あるいは企業による補償だとか、さまざまなことが行なわれてきました。いっぽう、日本はどうだったかと言うと、日本においては東京裁判で終わった、アジア各国と二国間条約を結び経済援助ということで各国の政府に対していくばくかの援助という形でお金を渡しましたけれども、具体的な戦後補償という形ではやってきませんでした。ですから、今も「慰安婦」問題をはじめ日本政府を相手どった裁判が多くさ

れてますけども、それについても政府は戦争加害者としての責任は東京裁判で終わったとし、それから補償についても二国間条約・アジア各国との話し合いで済んでいるので個人補償はしない、ということで窓口を閉ざしています。

そういった状況が大きな違いじゃないかな、と思います。それで、日本がそうやって戦争補償をしないで済んできた背景には、アメリカの意図があります。アメリカが、結局、一九五三年のサンフランシスコ条約において日本は戦後補償をしなくていいよという免罪を与えた。そのことによって被害国に対してそれをしなくてよくなったと同時に、その分のお金を日本の戦後の経済復興に当ててきたし、そのことが強いては軍事費だとかそういった部分に使われるようになった、という経過があります。

アメリカがどうしてそういう政策をとったのかというと、中国や朝鮮という共産国に対して日本がひとつの砦としての役割を果たすという意味での軍備増強をアメリカが望み、その結果、一九六〇年には日米安保条約が結ばれたという経過があります。そういう意味で、日本とドイツを比較してドイツが素晴らしいとか凄いとか言ってるわけじゃありません。戦後六〇年代に入るまではドイツのなかでもそういったナチスドイツの歴史は隠そう隠そうという意識が働いて、当初はなかなかそのことが社会のなかで表面化したり、教育として教えられませんでした。どうしてそう変わったのかというと、一九六〇年代ってというのは、「スチューデント・パワー」と言っ、て、各国で学生たちが立ち上がったんですね。韓国では独裁政権だったイ・スンマを学生たちのパワーで倒したんです。これが「四・一九革命」って言われるものなんですけど、中国では五四運動というのが起こって、中国でも学生たちが活躍した時代だったんですが、ドイツでも学生たちが大人たちに対して自分たちの過去の歴史をキチッと教えてほしいということで立ち上がり、過去の戦争犯罪を明らかにすべきだということをやりました。そういう経過もあったので、ドイツは戦争と向き合わざる得ない状況が作られたのだ、と思います。

全体的な戦後補償について述べてきたんですけども、次に、「慰安婦」問題について話していきたいと思います。慰安所というのが一番最初にできたのは、一九三九年くらいに設置されるようになったと言われてます。最初は中国、日中戦争のときに慰安所ができて、ここを出発点にどんどん広がっていった、と言われてます。

なぜ慰安所ができたのかについて見ていきたいんですが、「慰安婦」の問題が出ると、たとえば、小林よしのりさんとか、「新しい教科書をつくる会」の人々は何と言っているかと言うと、「戦場に強かんはつきものだから、それは犯罪じゃない」と言ってるんですね。「慰安婦」についても、「彼女たちは金儲けのためにやった売春婦だ」と、こんなふうと言って冷や水を浴びせてきました。その背景を見てみましょう。

たしかに、軍隊と「慰安婦」、女性への暴力っていうのは、すごく密接に関連しているんですね。軍隊のあるところに必ず女性に対する暴力っていうのが——強かんだとか売春施設だとか——ついて回るっていう歴史があったのは確かです。たとえば、PKO法案ができて自衛隊がカンボジアに飛んだ時にですね、カンボジアに売春街ができたというふうに言われて批判の声があがりましたし、沖縄でも少女が強かんされるといふ事件がありましたよね。あの時は被害者が事件のことをはっきり話して問題になりましたけど、米軍兵士に強かんされても被害者が口を閉ざしてしまう事件は少なくないと思います。そのことが表面化されてないだけで。韓国にも駐韓米軍施設が一〇〇カ所もあるんですよ。日本も沖縄だけでなく、湯布院だとか三沢だとか、全国各地にありますね。当然、売春街だとか米軍のための歓楽街っていうのがたくさんできているんですよ。韓国では、そういう歓楽街などで強かんや虐殺があります。女性たちに対して強かんするだけでなく、虐殺するっていうようなことがあったりして、売春を生業とする女性に対しての暴力は、日常的にありますよね。

このように、戦争や軍隊と暴力は密接に関係しているんですけども、この「慰安婦」問題の特徴は、日本軍、あるいは政府が自ら慰安所を作って、そして兵士たちに性を提供した、国策としてやったということです。ですから、国際法上、彼女たちは慰安婦じゃなく性奴隷として働いた、とされています。

なぜ慰安所ができたのかというと、三つ理由があって、一つは強かん予防のため。たとえば、日本軍兵士が民間の女性を片っ端から強かんしたりということが起こって反日感情がますます高まってよろしくないということで、慰安所を作ったということです。もう一つは、戦争が深まるとそこまでできなかったんですけども、いちおう慰安所は軍隊が管理していたので、定期的に性病の検査をしていたんですね。検査をしたうえで安全な性を軍隊に提供するという意図があったんですね。もちろん、背景には性病に罹ると戦力が低下するからなんですけども。三つ目は、兵士の性を管理するということです。今だったら戦争の真っ最中でも、アメリカ軍などは定期的に休暇を与えて帰らせる。あの当時の戦争っていうのはほんとに長引く戦い、いつ終わるともしれない戦争のなかで、休みもなく毎日毎日いつ戦闘が起こるか分からないなかで、もう神経がズタズタにされる。上司からの制裁があったり、規律が厳しく、上司には一切逆らえないし、殺されても文句は言えないという、そういう上下関係・規律のなかで兵士たちの不満のはけ口を、ということで慰安所を作っていったわけなんです。

当初は、日本のなかでいわゆる売春婦として働いていた女性を連れて行ったりだとかしていたんですけども、そのうち若くて健康な・性病の心配が一切いらぬ、そういう女性を集めようということで、植民地下にあった朝鮮・台湾の人たちが集めら

れます。いちばん多かったのは朝鮮の女性たちです。韓国の被害者ハルモニたちの証言を聞いてみますと、ほとんどが十三、十四、十五歳くらいが非常に多くて、それくらいの年代に外で遊んで「いい仕事があるからおいで」って言われて連れて行かれたり、あるいは学校へ軍隊が来て校長を通して何人か仕事しに行くということで連れて行かれて「慰安婦」にされたりとか、いろんな形があるんですけども、多くは騙されてほとんど強制的でした。いわゆる町長さんみたいな人が、この村では何人の女性を集める、と一緒に集めて回ったりだとか、そういった形もありました。だいたい朝鮮半島だけで二〇万人くらいじゃないかと言われてはいますが、キチツとした資料が残っていないんですね。正確な数は分かりかねますけども、やっぱり朝鮮の女性たちが圧倒的に多かったと言われてはいます。

戦争がひどくなっていく過程のなかで、軍が移動することにより慰安所を作って、インドネシアとかマレーシアだとか移動するにしたがって、その地域の学校や教会を軍が接収して、そこを慰安所として使った。もちろん、ずっと船とか列車で連れて回った女性もいましたけど、なかには現地に行って現地調達ということも、フィリピン・インドネシアなどたくさんの女性たちが名乗り出てますけども、そうやって現地で女性を集めて慰安所で働かせる、ということがありました。

お金なんか見たことない、という人も多いんですね。軍票をもらっていたって人もいますし。それから、割り当てられて、今日はお前の番だと言われて行かされた人もいますし、なかには現金をもらったという人もいました。いろんな場合がありますけども、やっぱり、お金をもらって商売としてやった、という意識は、ほとんどありません。強制的に連れて行かれて性の奴隷として慰安所で働かされた、というのが実態です。

そして、場所についても、さっき言ったみたいに、日本軍の行く先々で慰安所が設置されて慰安所生活を強いられたということがありましたし、また、日本国内でも、沖縄、東北、北海道だとか松代だとか、一番多かったのは、やっぱり沖縄ですね。沖縄には、分かっているだけでも、百三十一カ所の慰安所があったと言われてはいます。日本全体では四百カ所くらいあったんじゃないかって言われてはいますが、これも正確には分かっていません。

どんな生活をしていたかって言うと、一日に、多ければ三〇人くらいの人たちを受け入れなければならなかったという、非常に厳しい現実がありました。あるいは、いろんな証言によれば、兵隊基地、すぐにでも戦争に向かっていかなければならない状況で兵士が待機しているような場合は、一日四〇～五〇人の男性を相手にしなくちゃいけなかったという、本当に非人間的な、想像を絶するひどいことが行なわれていた

わけなんですね。

そういった、性的な暴力をふるわれる以上にですね、兵士たちが精神的に非常に病んでいる状況じゃないですか、長引く戦争のなかで凶暴にもなって。最初は人を殺すのが怖くて刀を振ることさえためらった兵士たちがアジアの人たちをまるで虫けらのように殺すことができる、っていうね。その間の精神の変化というのは、ものすごいものがあると思うんですよ。とても人間と思えないような、凶暴な精神状況のなかにおいてですね、女性が思うようにいかなかったりとか少しでも抵抗したりすれば、すぐに突き刺してその場で殺す、というようなこともあったそうです。その時に受けた刀傷だとか、ほとんど拷問のような形でケガを負ったのが、今も後遺症として残っている、っていう被害者の人たちもたくさんいます。

そればかりじゃなくて、もちろん妊娠しますよね。妊娠したり性病にかかったり、兵士からね。今年〔二〇〇二年〕の一月、韓国から「ナヌムの家」っていう、被害者の方たちが一緒に暮らしている家があるんですけども、そのこのホルモンがひとり来られて、私が通訳を頼まれて証言を聞いたんですけども、彼女の場合は慰安所で日本脳炎（チョウチフス）に罹ったんですね。熱がやまないからといって、ある日トラックに乗せて山奥に連れていかれたんです。感染するし、なおかつ役に立たないということで。そして、トラックを降りると、彼女を焼くために火を燃やしていて、その火のなかへ彼女を投げ入れるだけの状態だったそうです。でも、日本人兵士のなかに朝鮮人兵がひとりいたんですね。彼が仲間を誘って連れて来ていて、そこで日本人兵士らと殴り合いをして、彼女を守って一緒に逃がしてくれた、という生々しい証言もあったんですが、そんなふうに関に立たないなら死んでもかまわないという、そういうことが日常的に行なわれていた。あるいは、妊娠すると非情にもほったらかして食事も与えずに死ぬのを待つだけだったりとか、数えきれないくらいむごい状況が日常的にあったということです。

さらにひどいのが戦後なんです。もちろん、「慰安婦」として働かされた人たちの戦争中の生活っていうのは、もう本当に非人間的というか、地獄のような生活を強いられていたわけなんですけど、じゃあ、戦後はどうなったんでしょうか？ たとえば、男性の場合、男性だって強制連行され、トンネル掘りをさせられたり、鉄道をつくるために、朝から晩まで御飯も食べさせられずに働かされたりだとか、たしかにいろんな被害に遭いました。しかし、彼らは一九四五年八月十五日、解放された時に「マンセイ（万歳）」と叫んで祖国の解放を迎えたんですね。やっと故郷へ帰ることもできたし、生活はもちろん厳しかったけれど、でも、やっぱり解放の日を喜んで迎えることができたんですね。

しかし、どうでしょう？ この「慰安婦」の被害者の人たちは？ 解放されても、自分たちの帰る家がないんです。なぜなら、帰っても受け入れてくれる家族がない。こんなにボロボロになった体で恥ずかしいし、また、親も、儒教の国っていうこともありますし、そういう時代でもありましたから、性的に蹂躪された、そういった自分の身を思うと、家に帰ることができない。これは家の恥だ、家族の恥だというふうにして、故郷に帰ることを断念した人たちもいます。帰るどころか、戦後日本はこの慰安制度というのを徹底して隠して闇に葬ろうとして、そのために現地、中国だとか東南アジアだとか、そういった所で「慰安婦」として連れて行った女性を放り出してそのまま捨ておいて、軍隊だけ引き揚げて帰ってきたこともありました。あるいは、本当に証拠を隠滅してしまおうということで、彼女たちを洞窟に入れて、その洞窟を爆破して一斉に殺してしまったりだとか、そういうこともありました。

生きて帰ってこれた人は、ほんのわずかです。そのわずかに帰ってきた人たちのなかでも、喜んで解放の日を迎えるどころか、本当に自分の身が恥ずかしいということで、祖国を目前にしながら、船から身を投げたりだとか、自殺したりだとか、そういうこともありました。

カン・ドッキョン・ハルモニは、絵を描いているんですね。日本でもよく絵画展をやったりしていますが、なぜ絵を描くかという、心を癒すことに繋がるんですね。自分が受けた心の傷だとか自分の体験だとかを絵で表わす。カン・ドッキョン・ハルモニは五年ほど前にガンで亡くなられたんですけども、自らの体験ばかりでなく「責任者処罰」などの象徴的な絵を描き残しています。彼女は解放を迎えたとき、自分が妊娠していることに気づいたんですね。それでも故郷に帰ろうと思って、列車に乗って故郷に向かいます。そして、やっと大きなお腹で故郷の家に辿り着いたんですけども、ドアを叩いて、オモニが、母親が出てきたんですね。すると、オモニが「そんなふしだらな娘は私の娘ではない」と言うとバタッとドアを閉めた、というんです。それで、カン・ドッキョン・ハルモニは、そのまま、結局、黙って去ってしまった。ある日、突然行方不明になって、誰もその後の経過を知らなかった。彼女は仕方なくさまよって、最終的にはなんとか子どもは生んだんです。けれども、働かなきゃいけないということで、子どもを孤児院に預けるんですね。自分が慰安生活をしている間にできた、日本の兵士との子どもなわけです。で、その子どもをどうしても心から愛することができなくて、面会に行くのも季節に一度くらいにだんだん足が遠のいてしまったんです。あるとき、自分が買ってあげた服をよその子どもが着ていたそうです。それで園長先生に、「自分の子どもはどうしたのか？」と聞くと、「病気で亡くなった」と言われたそうなんです。彼女は、そのことをものすごく心に深い傷として背負っ

て、母親に対して受け入れられなかった傷、そして、自分の子どもをそのように死なせてしまったという心の傷を背負って、生きてきたわけです。

ですから、私がここで言いたいのは、そういった経験をいくつもいくつも、たくさんハルモニたちがしてきたわけなんですね。慰安所生活で彼女たちが受けた心の傷や被害を背負い、戦後それを上回る苦しい生活のなかで、自己否定しながら、自分は汚い・自分は生きていく価値のない人間だと思いながら、誰からも愛情をかけられることもなく、誰にも自分の苦しみを語ることもできずに、戦後五〇年という長い歳月を生きてきました。そして、「慰安婦」という存在が歴史の闇のなかに抹殺されて誰にも語られることなく、歴史として教えられることもなく葬り去られてきたということが、彼女たちにとってはどれほどの苦痛だったことか、ということなんです。人間というのは、自分の存在が忘れられることはとても苦痛であるし、ましてや、それがとても否定的な・恥ずかしいことだというふうに分で思い込んでしまうことで、苦難の歴史を生きてこられたということです。

さきほどのカン・ドッキョン・ハルモニはそういった人生を送ってきて、最終的には「ナナムの家」という被害者の方の住む施設（仏教が建て、被害者の方がいま一〇人くらい一緒に住んでいらっしやる）で暮らすようになったんですけども、彼女はしっかりと証言もできるので、東京に来て証言したりだとか、裁判で証言したりするときは、必ず来られてました。被害者のなかには自分の過去をいっさい喋らない人、口ベタで喋れない人、いろんな人がいるんですけども、彼女はみんなを押しつけてでも前に出て、私はこういう被害に遭いました、って証言するような人だったんですね。ある意味では、他の人から愛されてもいました。支援者の方や外国の支援者たちにもたくさんの愛情を受け、愛されてもいたんですけども、彼女は自分の人生を捨てていたので、酒は飲むわ、タバコは喫うわで、自分の体を大切にすることができなかったんですね。それで、「そんなにしたらアカンよ、日本の政府が謝罪するまで長生きせなアカンから、タバコは喫わないで、酒もやめ、自分の健康に気を使って長く生きるんや」と言うハルモニたちもいたんです。しかし、カン・ドッキョン・ハルモニは「いつ死んでもいい、日本を恨みながら私は死んでいく」——そんなふうにおっしゃってて、そして、ガンで亡くなられた。

それはひとりの例ですけども、次に九〇年代に入ってから「慰安婦」問題が出てきたんですが、その経過について少し話します。一九九一年、キム・ハンスクさんという人が初めて名乗り出て、社会的に大きな問題となりました。なぜ彼女は名乗り出たかという、韓国で「慰安婦」問題は少しずつ知られてはいたんですよ。小さな本になって紹介されたこともありました。ですが、大きな問題として取り上げられるこ

とはなかったんです。八〇年代末に韓国の女性団体がこの問題を深く掘り下げて調査してみようということで、調査活動が始まったんですね。そして、日本政府に対して五〇年前の「慰安婦」問題について真実を明らかにせよ、と迫ったんですね。それに対し、たしかに慰安所はあったらしいけれども、それは業者がやったことで、政府は関与してませんでした、というふうに日本の国会で答弁したんですね。で、それに対して、キム・ハンスクさんがその様子をテレビで見ている、そんな嘘はつくもんじゃない、ここに生き証人がいるじゃないか、ということで、すぐに女性団体に電話をして、私が「慰安婦」だった、と名乗りを上げたんですね。それがきっかけとなって、韓国はもとより、フィリピンや中国、台湾やオランダ、インドネシアなど、アジア各国から、じつは私も「慰安婦」させられていたということを証言し始めたんですね。そのことによって、日本政府に対して八件、裁判が起こされています。日本政府は、さきほど言ったように、戦後補償については二国間条約、あるいはサンフランシスコ条約で解決済み、こっちとしては責任がないので、戦後補償として日本は一切いたしません、という姿勢です。裁判が起こされても、入り口で拒否して向き合おうとしていないのが現状です。

裁判では全然ラチがあかないということで、じゃあ、次に何をしたかということ、国連の人権委員会だとか、ILO [国際労働機関] の専門委員会に訴えたりだとか、あるいは、ICJ [国際司法裁判所] に訴えたりだとか、さまざまな形で国際機関に訴えをしながら、この問題の解決に向けて九〇年から十二年間運動が続けられてきました。それによって、国際機関も日本に対して何回も勧告は出しています。キチッと賠償すべきだということも言っていますし、国連の調査委員会も調査結果を発表して、たしかに日本は慰安所を作ったたくさんの女性たちに被害を与えたということで賠償するように、と言ってきたんですけども、日本政府は戦争犯罪としての「慰安所」政策については認めていません。

民間人による調査、アメリカの資料、あるいは、被害者たちがたくさん名乗りを上げてきたので、最終的に日本は慰安所政策に軍が関与したということ認めました。だって、そうでなければ、輸送することも軍の許可なしにできるはずがないので、民間業者が連れ歩いたというのはとんでもないデタラメで、そういった事実については認めたんですけども、戦争犯罪としては認めていない。あるいは、国際法に当てはまらないなど、さまざまな理由をつけて責任を認めず、いっばうで歴史を歪曲し教科書から慰安所があったって事実さえ抹消して、子どもたちに教えまいとしている。そういう動きが出てきている。それは、右翼とか言われる人たちが、そういった告発の動きに対して攻撃をしかけてくるというふうな状況に、いま、あります。

二〇〇〇年一二月に東京で、女性国際戦犯法廷が開かれました。女性国際戦犯法廷というのは、国際的な女性団体だとか、あるいは「慰安婦」問題を支援している各国の団体が一緒になって準備したんですけども、いちばん中心になってやったのは日本の女性たちです。日本の女性たちが戦争犯罪者を裁こうと提案し、賠償も大事だけれども、歴史の真実を明らかにし、加害者を明確にして処罰しなくては本当の解決に繋がらないというのが、多くの支援者たちの考えです。

加害者を処罰することについて、もう五〇年も前のことを今さら裁くって、それはもういいんじゃないか、と思うかもしれませんね。実際に、一〇年前に韓国の運動体から責任者処罰の声が挙がったときに、日本の運動している人たちの間では非常に懐疑的なものがありました。どういうことかということ、「慰安婦」制度の加害者を明確にして処罰しようとなったら、加害者の一番の筆頭に来るのは、天皇ですね。とても日本の状況で「慰安婦」問題を訴追するっていうのは非現実的だ、と。あるいは、日本には過去を水に流すっていう風潮があって、過去のことをいつまでも言うてるの、そういったことをあまり激しくすると却って受け入れられないよ、という声が本当に挙がったんです。にもかかわらず、やっぱり真実を明らかにして訴追するっていうことは、処罰を与えるということじゃなくて、加害者も被害者ともに正義を目指し、そして、許しというものを作り上げていく、つまり、この裁判をするっていうのは、ある意味、お互いに許し合い、和解するための一つの過程として裁判がある、ということで、民衆法廷をやっ払いこう、ということになったのです。

民衆法廷であり、実際に処罰を与えたりとかいうのはないんですけども、でも、普通の法廷と同じように段ボールに何十箱という資料を調べ上げて、たくさんの法学者や専門家の人たちの力によって、まさに民衆の力でやり終えて、その判決が昨年〔二〇〇一年〕に出ました。やっぱり、この「慰安婦」問題というのを過去のこととして終わらせるんじゃなくて、キチッと真実を明らかにし、再びこうした犯罪を繰り返させないということが大事だった、ということです。

ひとつ言い忘れてたんですけど、女性国際戦犯法廷に世界各国の被害者の方たちが名乗りを上げたんですけども、ひとつの国だけ被害者が出なかった国があったんですね。それは、日本です。ひとりも名乗り出ていないからです。ひとりも被害者がいない——ではありません。ここから、日本の問題が見えてきます。日本の場合は、売春婦出身の人が「慰安婦」にさせられた人が多かったんですね。日本のなかでは名乗り出にくい状況が、今も作られているんですね。「慰安婦」の人たちが汚いものだという認識と同時に、その人たちはお金で働いていたんだという決めつけをして、彼女たちを隅に追いやる状況があると思うんですけども、ここで女性国際戦犯法廷が、被

害国であれ加害国であれ、受けた被害は同じだということ、すべての女性にとってそういう被害っていうのは同じように裁かれなくちゃいけない、ということを明確にした点について、私は評価します。彼女たちも、日本の戦争によって犠牲となった人たちです。彼女たちは、親によって、あるいは、自ら身を売るしか生きる術がなかったという状況のもとで、結果的に「慰安婦」をさせられたという経過を考えると、彼女たちを全く同じ被害者として見るべきだ、ということがこの裁判のなかで明らかになっていった、ということも大きな前進ではなかったかと思います。

まとめとして最後に言いたいんですけども、私は、最初は「慰安婦」問題っていうのは民族問題だなと思ってたんですが、やっていくうちに、これはかなりの比重で女性問題だな、って思ったんですね。男性は性欲を我慢できない、というのも作られたものだと思う。そういうふうで作られたものによって、軍隊っていうのはすごく暴力的で、暴力のはけ口を求めるといって、戦争を遂行していくなかで押し付けられた考え方もあるし、非人間化されていった、ということです。人間の心を奪ってしまう戦争っていうのは恐ろしいものだということ、女性が被害者になると同時に、男性も加害者にさせられてしまうという危機感を持たないといけない、と思います。被害者となった人たちが名乗り出た背景には、二度と自分たちのような被害者が出てほしくない、二度と戦争を起こしてほしくない、だから、自分は証言した、と言っておられます。彼女たちは、けっして、お金を目当てに証言してわけではないんです。お金をもらって優雅に暮らそう、ってわけじゃないんです。自分たちの踏みにじられた人間としての尊厳を回復したい、ということと同時に、こういった思いを誰にも味合わせたくない、それは、朝鮮の人たち、日本の若い人たちにもそうであって、だから、証言に立った、っていうことです。

一九九三年に、「女性に対する暴力撤廃宣言」というのが出されたんですね。女性に対する暴力っていうのは昔からありましたけども、女性に対して暴力をふるってはいけないという宣言が、初めて一九九三年に出されました。一九九五年に北京女性国際会議があったんですけども、そういった経過を経て、いま日本でも、セクハラの問題だとか、ドメスティック・バイオレンスだとか、女性と暴力について取り上げられて、これは人権の問題で、女性に対する暴力は犯罪なんだ、っていうことが言われるようになりました。その背景として、「慰安婦」被害者の人たちが名乗りを上げたということがどれだけ大きな力となったか、女性の権利を獲得するために、そのことを実現するために大きな力になったんだ、ということを最後にお伝えして、私の話を終わりたいと思います。(拍手)

三. パンさんの講演を聞いた学生たちの感想

(1) ^{パン}方さんの話を聞いていろいろ思ったことはありますが、一番印象的だったのは従軍慰安婦問題の話の中に出てきた補償問題についてです。今まで従軍慰安婦関連の裁判が行なわれているのは知っていましたが、サンフランシスコ平和条約によって戦後賠償が免除されたことは初めて知りました。しかし、この話を聞いた時に自分の中ではある矛盾を感じました。それは、毎年のように話が出てくる北方領土問題についてです。北方領土問題は戦前に北方領土を持っていたと主張していますが、そのことだけを主張せず、従軍慰安婦問題についても過去の過ちを認めるべきだと思います。普段あまりニュースでは流されにくい問題ですが、今回のように知る機会をこのまま終わらさずにこれからも注意していきたいと思います。 四回生

(2) 従軍慰安婦の問題を、日本の国のことなのにどこか他人事のように思っていた。それは、マスコミなどの報道も大きな原因だと思う。虚構を真実と見誤らせるほどの真実性を伝えることも、真実の半分を映さぬことも出来る。マスコミによって真実の選択がコントロールされていたのではないだろうか。

第三者であるアメリカに、戦後の賠償をしなくてよいと言われて、しないのもおかしいのではないだろうか。どこか日本は他国ばかりを意識して自分たちの意見がないように思える。真っ先に他国、特にアメリカからどう思われるかを気にしているような気がする。

今日ではきっと皆、悪いことをしたと理解していると思う。日本と韓国という国で考えるのではなく個人対個人として考えてみると、罪を償うのは当然だと思える。もう昔のことで、これからが大切だと言う人もいるが、これからのためにわだかまりを取っておくことが必要だと思う。 三回生

(3) パンさんの話を聞いて、やっぱりショックを受けました。というのも、戦争の頃の話というものを今までちゃんと聞いたことがなかったからです。日本で話されている戦争の話は、やっぱり日本のことを守っているところがあると思うのです。ここで、具体的に「ショック」を話すと、日本兵がしてきたことが今現在の状況で考える時に想像さえもできないことで驚いたのです。

話は変わりますが、私には在日韓国人の友達があります。大学で知り合った友達なのですが、その友達は高校までは日本名で過ごしてきたらしいのです。私は、その友達と接したことが初めて在日の人と接した機会でした。私にしてみると、日本名が別に

あるということが不思議で、今でも不思議で仕方ありません。韓国名のままでは何か問題があるのでしょうか？ その友達には、どこか失礼な気がして聞いてないんですが……。しかも、私はパンさんに聞くまで、在日の人がいま日本に何人いるのかさえ知りませんでした。本当に在日の人に申し訳ないですよ。

戦争というものがもたらした、その被害を受けた国々の人、その当時のことを知っている人っていうのは、今私達が聞いている限りでは分からないくらいの傷を負って生きているのではないのでしょうか。その中でも、裁判という形を取り自分が受けた傷と立ち向かうというのは相当な勇気が必要だと思うし、その事実を打ち明けることで周りの人からの目というものもどこかで気になると思うのですが、本当に強い人だなと思います。でも、日本からそういった事実を打ち明ける人がいないことはすごく残念だと思います。その人はその人で何かしら考えがあるのだとは思いますが、パンさんと同様私も勇気を出して告白してほしいと思います。というのも、戦争というものを体験していない私達にとって、戦争によって何が起り、どういう傷を負ったのか……そういう事実を知り、そういう事実を受け止め、今後同じことを繰り返さないようにする必要があると思うからです。実際、傷を受けた人の痛みを全て理解することは不可能かもしれないけど、事実を受け止めることは可能だし、私自身受け止めていきたいと思えたのです。

今回、パンさんの話を聞いたことはすごく貴重なことだったと思うし、本当にいい体験だと思います。こういう機会がもっと増えるといいなと思います。そして、パンさんの取り組みが今以上に人々に受け入れられることを期待しています!!

最後に、パンさんに一言!! 今回お話して下さって本当にありがとうございました。そして、これからも頑張ってください。応援しています。 三回生

(4) 私は方^{パン}さんの話を聞いて、北朝鮮のイメージがかなり変わりました。北朝鮮の情報はテレビでしか知ることができなかったのでそれをそのまま信じていた私も悪かったなあと思いますが、私は北朝鮮のことを怖い国だとか悪いイメージばかりを持っていました。昔、友達から聞いた話で、「北朝鮮には核が3つあって、そのうち2つが日本に向いている」と聞いてかなりびっくりしたのを覚えています。ニュースでも日本人を誘拐して朝鮮に連れて行っているとか、北朝鮮の工作員が夜に船で日本にやって来て偵察しているとか、核実験をやったとか、いいニュースを聞いたことが無いので、恐ろしい国だなあと思っていました。

今まで私は、北朝鮮は他のどの国とも国交もなくして孤立している国だと思っていました。でも、話を聞くと、けっこうヨーロッパの国々と国交があると聞いてびっくり

しました。私は、てっきり日本が北朝鮮と国交したいと希望しているけど、北朝鮮はどこどの国とも国交を拒否しているんだと思っていたからです。でも、実際は日本が拒否している!?(←ちょっと本当に言っていたのか記憶がなくて不安ですが……^{マツ})と聞いて、日本の方が何を企んでいるのか分からなくなってきました。

方^{バン}さんの話を聞いてからは、本当に怖い国は日本だと思いました。考えてみたら、不審船も北朝鮮らしき船とあやふやな表現で言われているし、確信もないのに北朝鮮と決めつけられています。マスコミによって、怪しい船はすべて北朝鮮と植え付けられている気がします。日本は、北朝鮮に対して悪いイメージを持たそうとしているように見えます。私の聞いた核の話も全然真実でもないのに、今までのニュースで考えを植え付けられていたため、疑うことなく今までずーっと信じていました。

いま改めて考えてみると友達からの話だし、思いっきり嘘っぽいです。それでも今まで信じていた私は、それだけマスコミを信じて、北朝鮮が怖い国だと信じさせられていたんだと気づきました。私はかなりマスコミの考えに洗脳されていたんだなあ、と実感しました。ニュースはすべて鵜呑みにしないで、自分で考えて、その裏にある真実を探さないといけないなあと思います。

5時限の保険論での話は慰安婦問題の話でした。少し4時限のゼミでの話に比べて難しかったですが、今も多くの女の人が苦しんでいるようで、早く問題を解決してほしいと思います。私は、女の人をおもちゃにしか思っていない男の人に腹が立ちます。戦場で女の人たちがいないからと連れて行かれて、好き勝手に使って終わりっていうのが、人間として見てない、ただモノだと思っているということです。そんなことをした日本の組織にも腹が立ちます。とにかく、戦争自体が悪いのです。多くの人が苦しめられて、得をする人といえば、上の人たちだけです。こんなに辛い戦争を世界中からなくして、二度と慰安婦のような人たちを出さない世の中にしていけないといけないなあ、と思います。

今回の方^{バン}さんの話を聞いて、今まで考えたことのないことばかりだったし、私の思っていたことと考えていたことはほとんど間違っていました。改めて、もっともっと知識を増やさないといけないなあ、と実感しました。 三回生

(5) わたしは今回の話を聞いて、わたしが今まで知らなかった日本軍の行っていたことを知り驚きました。日本が中国に対してひどい虐殺をしてきたことはわたしの学習してきた歴史の中に掲載されていましたが、女性を道具のようにして扱い自分の欲望を満たすだけのために捕まえていたことは学習していませんでした。なぜ教科書にこのことを掲載していないのかと文部省に尋ねたとしても、教育衛生上望ましくな

いなどという答が返ってくるのではないかと思います。わたしは事実をはぐらかし、日本の汚れた歴史を公表しなかった文部省のため、今回の講義を聴くまで知らなかった自分を知りました。事実を知ったことのショックも大きかったのですが、そのことを知らなかった自分を恥ずかしくもありました。

今回のわたしのように、事実を知らずにいる日本人は少なくないと思います。実体験している人達のためにも、わたし達は真実を知り深く反省すべきではないかと思いました。 三回生

(6) 僕は、ゼミで北朝鮮について僕が話したことを振り返ってみました。僕の意識では、北朝鮮という国は孤立した・外交を開かない国でした。そして、日本人を何人も拉致し日本を目の敵にしている印象を持っていました。しかし、このゼミで、先生や学外講師の方の話を聞くと、いくらか“ずれ”が生じていることに気づきました。先生は、外交を開こうとしていないのは北朝鮮ではなくて日本の方だと言いました。僕が一番驚いた点はそこにあります。これは大きな“ずれ”だと思います。僕の今までの考えが根本的に間違っていた、ということになります。しかし、真実はどうなのでしょうか？ 本当に北朝鮮は僕が思っているような国ではないのでしょうか。もしそうであれば、これほどまでにテレビや新聞などで北朝鮮の拉致問題やミサイル、不審船、北朝鮮の不法侵入などの問題が取り上げられるのでしょうか。この“ずれ”を限りなくゼロに近づけることが、日本と北朝鮮の外交に繋がると思います。 三回生

(7) いろいろ勉強になった。今の在日韓国人の人たちの気持ちや日本人の差別などいろいろ考えないといけないと思いました。けど、ぼくはバンさんに失礼なことを言ってしまったのかも……。質疑のときに池野先生に当てられて、朝鮮学校のことを少し昔は批判していたというのを言った²⁾ら、池野先生の顔色がかなり変わったので、いらんことを言ったかなあと思いました。 二回生

2) 質疑のときにこの学生は、高校時代の通学途中にあった朝鮮学校の生徒たちのガラが悪く、しばしばケンカなどをした、という話をした。彼は、そのときに私の「顔色がかなり変わった」＝マズかったかなと言うのだが、私がそのとき答えたのは、体験はひとつの事実であること、ただ、この学生が「朝鮮学校の生徒たちがガラが悪く、しばしばケンカなどをした」という体験からそのまま一般化してもいいのかどうかを考えてほしい、ということであった。つまり、「ガラが悪い」生徒はどこにでもいるのに、たまたま「朝鮮学校の生徒」だからといってそれをすべての「朝鮮学校の生徒」(＝在日朝鮮人)に普遍化していいのかどうか？ という問題である。

(8) この前、学外講師の方が来られて話を聞き、その時に初めて朝鮮学校が作られた理由を知りました。日本に住む在日朝鮮の子どもたちに母国の文化や言葉などを教えるために、という風に言っておられました。

僕は大阪市内の小学校・中学校に通っていました。その学校の直ぐ近くというか通学路に朝鮮初級学校がありました。小学校に通っていた時は、なぜそんな学校があるのか、何のためにそっちへ通う人がいるのかなんて考えることもなく、ただ子どものケンカのように悪口を言い合うようなことをしていました。ひとつ分かっていたことは、自分とは違う、自分たちとは違うということだけでした。さすがに中学校に通うようになると、もう少し事実というか現実を知りましたけど……。

少し話が変わるけど、僕は小学5、6年の時、◇◇県の◆◆市という◇◇県第二の町に住んでいたことがあります。その頃の移動範囲などを考えると、本当は探せばあったかもしれないけど、少なくとも僕自身は朝鮮学校があるって聞いたことはなかったし、見たこともなかったし、自分の周りに中国や朝鮮系の名前の人はいませんでした。そのことを思い出したら、今までは事実としては知っていましたが、特別意識しなかった、「大阪には在日朝鮮人が多い」ということを再確認できた気がします。

話は戻りますが、僕の通っていた中学校は同和教育推進校でした。そのお陰で、被差別部落の存在やそこに住んでいる人々が受けた嫌がらせやいろんな問題、障害者の方の話、在日外国人の話が教えられました。そういうことのお陰で、何も知らない同世代の人よりはそんな知識を持っていると思っていました。けれど、学校が建てられた理由、思い、歴史を知った時、たしかに日本の学校に通っている言葉にしても歴史にしても文化にしても学ぶことはまず無理だろう、建てたことは間違いではないと思いました。そういった歴史、昔の人たちの努力に対して、自分は今までアホなことを言っていたな……と少し反省しました。

また、先生はたぶん忘れていますが、ゼミ合宿に行って善通寺でおばちゃんに写真撮ってと頼んだ時“バカチョン”という言葉が出ました。その単語がよくないと知っていたので、そらあかんやろ！と思ったと同時に、たぶんこの人たちはそういうことに対して意識がとても低いんだと思いました。◇◇県に僕が住んでいたと言いましたが、あそこの人々も同じような気がします。やっぱりそういうことは身近にそういう対象がなければ意識も高くはならない、また◇◇県では周りに日本名ではない人がいなかったと言いましたが、いても大阪ほど仲間がいるわけでもないし、周りの意識も低いのを知っていて隠していたのかもしれない、という気がしてきました。

こう思うと、大阪に住むようになっていろいろ知らないうちに学んでいたんだなと思います。前のゼミで、自分は自分の孫の世代にはこういった問題は解決されると言

いましたが、今になってその難しさが分かりました。そして、自分の考えが甘かったと実感しています。今回、相手側からこういった経緯・悩みを聞いて、本当にためになった気がします。

またまた話は変わります。先日W杯を見ていて韓国がアメリカと試合をした日のことなんですが、韓国がアメリカに追いついた時のことです。少し前のソルトレイク・オリンピックのスピードスケートで韓国人の選手が判定の不利を受け、アメリカの選手に金メダルが行ってしまったということがありました。おそらくそれでだと思いますが、ゴールを決めた韓国人の選手がパフォーマンスとしてスケートの真似をしました。僕はそれを見て、スポーツの世界にそんな嫌みめいたことをした選手がとても腹立たしく見えて仕方なかったです。戦後の反日感情はまだ分からなくもないですが、このことと絡めて、韓国人の執念深さというか嫌らしさ、ねちっこさが嫌いです。この行動は一人の選手がしたことと言ってしまえばそれまでですが、その一つの行動のせいで、僕は僕のなかで良くなっていた日韓関係が少し悪化しました。 三回生

(9) 従軍慰安婦の問題については高校の時にもホームルームで勉強したことがあったが、やはりひどい話だと思う。確かに、戦争であるから侵略された側がそういう扱いを受けるとするのは仕方がないというのも一理あるかもしれないが、最低限の人権も守れないとなると何の秩序もなくなってしまう。戦争自身がなくなるのが一番いいのだが、なかなかそうはならない。だから、その中で非人道的行為だけはしてはいけないと思う。実際、アメリカ軍に捕まった日本人はひどい目には遭ってない。日本がそういう事実を隠そうとしていることについては、さらに駄目だと考えられる。自国の恥部を隠したいというのは分かるが、従軍慰安婦をさせられた方々は心に一生消えない傷を負い、祖国の人にさえ不潔と言われ、帰れない人もいると聞いた。そのような人達のためにも、すべて明るみに出して謝罪するべきである。被害者の方々もそんなに深く恨んではいないだろう。きっちりと謝罪して、今後そういうことが起こらないようにするために協力していくのが一番いい方向だと思う。だから、日本人としてもTVで肝腎な部分をカットするようなことはしてほしくない。

高校の時はプリントを読んで感想を書くだけのものだったが、今回話を聞いてどのくらい問題が進んでいてどのような弊害が生じているかが分かって、よかった。また方さんには頑張って運動を続けてほしい。 三回生

(10) ^{バン}方さんの話を聞いて、率直に、まだまだ差別はあると思った。

話は変わるが、「方清子」っていう名前は、一回で通じたことがないと方さんは言

ってた。僕も一回で読む自信はないです。そんなことはどうでもいい話で、在日朝鮮人の人たちには選挙権がない、って言ってました。これはどうしてだろう、と思いました。ずっと日本に住んでいるわけだし、選挙権はあってもいい、と思う。

それと僕が気になったのは、方清子^{バン・チョンジヤ}さんもすごく腹が立ったという、石原慎太郎の「外国人は犯罪予備軍」っていう発言です。なにも犯罪を犯す外国人ばかりじゃないと思うし、石原慎太郎のこの発言は、これは言ったらだめだろう、と思いました。方清子^{バン・チョンジヤ}さんが、外国人と日本人が同じ犯罪を犯したとしても外国人の方が取り上げられ方が大きい、みたいなことを言っておられた。それはそうだなあ～、と僕も思った。でも、日本人が外国にいて、もしそこで犯罪を犯したら、日本と同じことが起こるだろうと思う。たぶん、少し大きく取り上げられると思う。

あと、外国人は公務員になれるようになったが、消防士とかはまだ無理とのこと。僕は、外国人が公務員になれなかったのを初めて知った。しかし、消防士とかの国を守る公務員はまだなれないってとこで、差別的な状況はまだまだある。さらに、まだ感情的差別、入居差別。この入居差別ってのは、テレビで見たことがある。あんまりよく覚えてないけど、不動産屋に言わずと、外国人はうるさいから無理って。なにもうるさい外国人ばかりじゃないけど。それと、朝鮮学校は学校として認められてないと方^{バン}さんは言っておられた。これも疑問に思った。

ここから話は少し変わるが、正直、僕も高校の時、在日朝鮮人の人に対する差別的発言はけっこうしてると思う。なんか、高校の日本史かなんかの授業で在日朝鮮人差別用語みたいなものを習ったっていうか、これは使ったらだめだという言葉を勉強した。「チョン」という差別用語で、差別用語っていうか、このチョンというのは在日朝鮮人の人のことを馬鹿にする言葉で、僕は別に馬鹿にしたわけじゃないけども、この朝鮮っていう言葉の響きが面白くて、「チョン・チョン」言っていた。

でも、方清子^{バン・チョンジヤ}さんの話を聞いて、特に在日朝鮮の人と会うのも話を聞くのも初めてだったので、この話を聞いて、この言葉をアホみたいに言っていた自分を反省したいと思います。

あと、これも初めて知ったのですが、外国人の人が日本に働きに来ると、外国人登録カードっていうのを持ってないとだめ、っていうのも初めて知った。そして、とても面倒臭そうだな～、と思った。

最後に思ったのは、さっき言ったことだけでも、感情差別、入居差別とかいろいろあるなかで、方清子^{バン・チョンジヤ}さんは日本の人にもっと在日朝鮮人における歴史的状況を知らないといけない、と言ってた。正直、僕は、在日朝鮮人の歴史的事実とか知らない。やっぱり、もっとこの歴史的事実を知ろうと思った。方清子^{バン・チョンジヤ}さんの話を聞いて、い

ろいろ在日朝鮮人っていうことで嫌な目に遇ったと思う。方清^{バン・チョンジヤ}子さんの話を聞いていろいろ勉強になった。二回生

(11) 僕は、初めて在日朝鮮人の方清^{バン・チョンジヤ}子さんの話を聞かせてもらい、日本側の差別的行為が行なわれていることがたくさんあるとは知りませんでした。日本人は外国人＝犯罪者という偏見を持ち、マンションやアパートを借りる時にでも在日の人でも断られるというような出来事が起きているなんて、僕にとっては不愉快としか思えませんが、もし、真剣に日本で働きたいと思っている人が、実際に仕事が見つかりマンションを借りるために手続きしようとしても、敢えて店の看板に「外国人お断り」と書かれていない所へ行っても断られてしまうことがあると聞き、どこまで人を信じていないのかと思いました。

しかし、在日の方の仕事場というのは限られており、治安に関する警察官や消防士などにはなれず、子どもの夢までも壊すというのは、残酷なことだと思いました。子どもが本当に消防士になろうとしていて、子どもに親はどのタイミングでなれない事実を告げるのか、難しいところです。幼い時に言っても、大人になろうとしている時に言っても、間違いなく信じてもらえないはずですが、本当に日本を守るためになりたいと思っている人は、在日の方の中の五〇万分の一ぐらいの人は、過去の日本人の残酷な侵略を知っていても、過去を忘れ本気でなりたがっているかもしれません。

他にも、在日の方とかは、日本に滞在してもよいという証明書を常に持っていなくてはならず、風呂屋に行くぐらいならいらないだろうと思い、その帰りに警察に証明書を出すように問われても携帯しておらず、拘留所に連れていかれると聞き、驚きました。また、参政権も持たなくて政治に関することにも足を踏み込まず、日本の政治に対する不満が一方にたまるだけだと思います。

方^{バン}さんの子どもさんは日本の中の数少ない朝鮮学校へ行っておられて、授業では朝鮮本来の文化を学んでおられると思います。朝鮮学校へ行かす選択をしたのは方^{バン}さんなのか分かりませんが、何か考えがあって朝鮮学校へ通わせている気がします。

最近では在日の方たちは日本人と結婚したり帰化したりと自分のなかで考えて決断し、いろいろな行動をとっています。帰化をするとしても、住居や職業や収入や他にもたくさんの条件を持っていないと帰化できず、そう簡単にできるものではありません。それでも帰化した人がいるというので、努力の量が半端なものではありません。本当に誰にも負けない気持ちがあれば、どんな壁でも乗り越えて行けると思いました。その壁を超えている一人が方^{バン}さんだ、と僕は思いました。

このような話を聞かせてもらい、何のための人間平等、何のための基本的人権の尊

重かが分からなくなっていました。在日の方も人間なのだから、すべて成り立たないと不公平です。方さんの話を聞けば聞くほど、人間平等が人間不平等になっている常識が常識外れになり、世の中のあり方が不自然すぎると感じました。 二回生

(12) 私は、今回、^{バン}方さんの話を聞いて、今まで自分が在日の人についてどれだけ無知だったのかということに気づかされました。在日朝鮮人の人が五〇万人もいるとは知らなかった。私は今まで生きてきて、在日の人には一人しか会ったことがなかったので、そんなにも多くの在日朝鮮人の人がいるというのには驚かされました。在日朝鮮・韓国人の人はたくさんいるんだなあと思いました。

方さんは、在日の人はあまり本名を名乗っている人は少ないと言っていたが、日本人は自分自身ではよく差別などをする人種だと思っているので、あまり自分が在日だと知らせない方がいいと思うので、その方がいいんじゃないかと思いました。

方さんは、外国人の人は犯罪予備軍だと思われると言っていたが、私も多少なりともそんな風なことを思っていたところがあったので、悪いなと感じました。確かに犯罪を犯している人は圧倒的に日本人のほうが多いし、残虐な犯罪もほとんどが日本人の手によるものなのにもかかわらず、こういう考えが充満しているのは、マスコミなどの情報機関が外国人の人が何か犯罪を犯すと直ぐに大きく取り上げて報道するからだろうと思う。そういうところから変えていかないといけないと思った。

^{バン}方さんから聞いた、在日の人に対する法的な差別の多さにも驚かされた。最近まで外国人の人には年金を受ける権利がなく、国籍条項により公務員になれないなどの差別を法的に認めていることに怒りを感じた。日本人は、韓国・朝鮮・中国、その他いろいろな国々に第二次世界大戦によって多くの被害を与えた。韓国・朝鮮・中国人の強制連行、徴兵・強制労働などや、中国における南京大虐殺など、日本人は数多くの悪業とも呼べることをしてきた。にもかかわらず、なぜ朝鮮・韓国・中国などの国々の人々に対しての憲法、法律による配慮が欠けているのか。それどころか、差別をしているなんて許せない。あれだけ多くの人を殺して、あれだけ多くの人に被害を与えたのに、賠償金を払った〔事実認識の問題として、賠償金を日本は払ったのかどうかの検証が必要——池野注〕だけで許されると思っているのだろうか？ 世の中にはお金で解決できないこともたくさんあるのに、日本人は何でも直ぐお金で解決しようとする。今の大人たちが犯した罪は、決して彼らだけで償えるものではないので、私たちも少しづつでも償っていかねばいけないと思う。

方さんが、いま年間15,000人の人が帰化していると言っていたが、こんな状況ならば仕方のないことだと思いました。こういうことをなくすためには差別をなくすため

に、憲法・法律を変えていく必要があるのに、今の政治家は自分の私利私欲に走って国民のことを考えていないような気がする。今の日本人は政治に対してほとんど興味を持っていないので、そこらへんの意識の改革からしていくべきだと思う。それに、在日の人に選挙権がなければ、自分たちのことをよく考えてくれている人がいても、その人に投票できない。まずは在日の人に選挙権を持たせてあげる[!?!—池野注]べきである。日本人は自分勝手なところがあり、今の若者は今が楽しければそれでいいといったような考えを持った人が多いような気がするので、まず日本人がそういうところを変えていかなければ、差別もなくならないと思う。だから、私自身も他人を受け入れることができるような人間になりたいと思った。 二回生

(13) 保険論の授業にパンさんが来て下さって講義をしてくれました。私がパンさんの講義のなかで興味を持ったところは「慰安婦」の話です。

現在の社会では、俗に言う「風俗店・ソープランド」ではだいたいの女性が自ら体を売り物にして高い賃金をもらっています。私は、この仕事を立派とは言い切れないながら、ちゃんとした職業だと思いますが、女子高生などがオジサンに体を売る「売春」は絶対に許せません。買う方も悪いが、売る方がもっと悪いと思います。

この話は措いとして「慰安婦」の話ですが、「慰安婦」という言葉は聞いたことはあるが、そう深くどういうことをやらされたとかは知りませんでした。「慰安婦」は「風俗・売春」などと違い、国からの命令で軍人の性処理・慰安の手段のために集められた女性で、戦場に行って兵士の相手を強制的にしなければなりません。しかも、朝鮮などを攻めてる時には数人の日本人女性だけを連れて行って、残りは、悪い言い方ですが現地調達をして、何をされるか分からない現地の女性が「慰安婦」にされていたのを聞いて、すごくショックでした。日本もその事実をもっと公にして、例えば教科書などに詳しく載せてその罪を償わなければいけないと思いました。 四回生

(14) 従軍慰安婦のことは多少の知識はありましたが、話を聞いてより深い知識を吸収できたと思います。特に、戦争が終わった後の従軍慰安婦のその後のことをほとんど知らなかっただけに、帰る所がなくてそのまま死んでいくというのを聞いた時にはショックを受けました。日本の政府は昔のことだと言って責任逃れをせずに、きちんとした対応を取ってほしいと思います。 四回生

(15) 課題図書野村進『コリアン世界の旅』（講談社プラスアルファ文庫 99年）を読んで在日の知らざる姿を知ることができました。日本はどうも自分たちとは違う者

を排除する傾向があるようですね。それは、孤立した孤島で似たような人々でずっと生きていたという歴史的背景があり、みんなが同じようであった方が争いが起こらず団結し易いというメリットもあって、そうなってきたのでしょうか？ しかし、こういった日本的なやり方には限界が来ています。人々の自由な往来が進んで日本もみんな同じではない多民族国家へと向かっていることもあります。自分たちとは違うと言って一部の少数の人々を追いやるやり方はもう許されない。かつては身分制などそういった差別が容認されていた時代もありましたが、これはれっきとした誤りであったわけですから、少々生まれが違うとって日本に住んでいるのに参政権を認めなかったり、居住を認めようとしなかったりするのは、おかしい。同じ人間であり、同じ日本に住む仲間だと思わなければいけないと思います。

なぜ差別が起こる？ 先に述べたような、日本にある、違いを嫌がる排他的思考の他に、とりわけ朝鮮に対しては歴史的な関係も差別につながる強い要因となっていると思います。特に、日本は朝鮮に侵略していろいろ悪いことをしたわけで、在日朝鮮の人は日本人に対し良い印象を持ってない。日本人は日本人でかつて朝鮮を支配したという優越感(?)を持って見下したりしてそうで……。そして侵略したことは悪いのだが、北朝鮮・韓国は国内に問題が起こったとき国民の目を国外へ向かわせるため、もしくは国民の意識を統一させるため、必要以上に反日政策を採っていることも、日本人に嫌朝鮮人といった感じになってしまい、お互いを特別視し、そういった背景もあって、特に在日コリアンの人々には風当たりが強くなってしまっているのではないのでしょうか？ それを解決するには、お互いが相手を理解し尊重することが必要です。あっちが悪いこっちが悪いと言っていたら、何も始まりません。同じ人間なわけですから、それは可能だと思います。本のほうに載っていたのですが、阪神大震災での日本人と在日コリアンの協力などお互いが理解された良い例だと思います。負の歴史もあったわけですが、これからはどんどん協力して良い歴史を作り上げていけば、朝鮮の人とは普通の関係よりももっとすごい仲が生まれてくるのではないのでしょうか？

もうひとつ、この本を読んで、焼肉、パチンコに在日コリアンが多く就業しているというのは今まで知らなかっただけに、驚きでした。あと、神戸の長田の靴の話は今の地元（神戸市なんで）の話だけに興味を惹かれ、ぜひ長田に靴を買いに行きたいと思いました。震災後、長田の経済は低迷していると書かれていましたが、長田に二回行った僕もなんとなく寂れているなあと感じていました。新長田の駅の方は地下鉄が開通したこともあって綺麗ではあったのですが……。

余談ですが、新長田に行ったのは神戸名物そばめしを食べに行ったからでした。しかし、必要ないと言われている空港を作るぐらいだったら長田の復興に金使えよーと

思ってしまうのは僕だけでしょうか？（中略）

しかし、在日朝鮮人は日本社会でうまく就職させてもらえなかったからパチンコや焼肉といった不安定な職業へ追いやられた……。それは、今でも続いているのでしょうか？ 近年そういった問題に対していけないという意識が広がり、かつてに比べれば差別意識は格段に減っていると思うのですが……。もう、そんなことはない、そうなってほしいですね。

まとめ。なんだかんだと言って同じ人間なんだから、生まれがどうか血縁がどうかで差別するのはおかしい。これが結論です。同じ日本に住む隣人なわけですから、そういったごく自然な心を汚されないように守り抜いてほしい。そして、これからは朝鮮とはお互いを助け合える大事なパートナーであって、良きライバルとなってほしいです。

三回生

(16) 以前に在日二世・三世について書いたことを思い出しながら、『コリアン世界の旅』を読みました。そうした中で途中とても不思議というか何というか、「じゃあどうすればいいの？」と思うところがありました。それは102頁の「『いいやんか、韓国人でも日本人でも関係ない』って。それにすごく引掛かったんですよ。親しい日本の子が一緒になって考えてくれないということに……」というところの文です。

日本人の立場から見て、なぜこういった発言について批判的なことを言われなければいけないのだろう？ と思いました。おそらく、自分もそう思うから。相手（在日の人）がそのことを気にしていると思わせるような告白をする、告白したからこっちはそういった日本・在日なんて関係ないという意味で「いいやんか」って言ったという風にしかとることができなかつたし、その言葉の裏にいやらしい気持ちは含まれていないと思います。本人がずっと自分が韓国人ということを隠し続け、そのことが嫌だから親友と思える友達に本当のことを告白した、その結果、一緒に考えてくれなかったとショックを受けた。じゃあ、そういった告白をされる受け手、この場合日本人はなんと言えれば相手は満足なのか？ 考えた結果が、「いいやんか」だと思います。親友と思える相手なら、その相手も同じように思っていると思うだけに、そのことをきっかけに離れて行ってほしいの？ と思いました。

こういった考え方が今日本で暮らしている在日韓国人の中でどれだけの人が思っているのかは分かりませんが、少し勝手すぎると思いました。自分の国、国籍、名前に誇りを持てるということは素晴らしいことだとは思いますが、隠して日本名で生きていくことも何の問題もないと思います。文中にもありましたが、日本で生きていくことを選んだのだから適応していくことは必要だと思います。この立場が逆になったら、日

本人もそうすることが必要だと思うし、「妥協」と「適応」とは違うと思うし、「誇り」と「意地」も違います。そして、日本人よりも在日の人の方に、なにか「自分たちはいつも被害者だ」という被害妄想的な考え方というものもあり、「在日」ということにコンプレックスを抱え、自らその中に閉じこまっているように思えました。

ただ、今の日本の社会の仕組・制度の中に日本で住む外国籍の人に不利になるような法律などが存在するために、こういった考え方が生まれるのか、とも思えます。だから、今はなんだかんだ書きましたが、どっちもどっちではないというのが結論です。将来、法律が変わり、日本で生活する人間すべてに平等の権利が与えられる時がきて、その時までこういった現状が続くなら、それは日本人に責任は全くないと思います。また今、外国籍の人が日本の生活環境に嫌々妥協するのではなく、少しでも前向きに適応・順応していったらどうかと思いました。

「パチンコ問題の構造」では、パチンコ好きな自分にとっては面白く読めました。(中略)「焼き肉はどこからきたのか」では、日本の焼肉と韓国の焼肉のスタイルが違うことを知り、本場で韓国の焼肉を食べたいと思いました。

この本を読んで心に残り、また、驚いたことがあります。それは、298頁にある、韓国国内での地域差別の存在でした。日本国内での地域差別、外国人差別の存在はいまさら言うこともないくらい知っていましたが、テレビなどでの韓国人の日本人への言い分などを聞いていたら、そのようなことは韓国ではないんだと思っていたからです。差別といっても地域・身分・男女差別などいろんな差別があり、差別という言葉やその行為自体、される側に立たなければ、本当の辛さ、苦しみ、そういった行為をする人への憎しみ、怒りは分からない。理解しようとしても、差別されている人からすれば、それは同情ととられる。じゃあどうしたらいいの？ というのと、差別それ自体は良いことではない、でも今、この世の中にある種類の差別がなくなったとしても、次、違った形の差別行為が出てくるのではないのか？ 本当になくなればいいと思っている反面、なくなることはないだろうというのが、僕個人の考えです。

最後に、本文からはかなり外れますが、最近ニュースや新聞で北朝鮮問題がやたらと取り上げられています³⁾。そのことについてですが、今まで頑なに拉致などしていないと言っていた国が手のひらを返すようにその事実を認めたことに、認めたこと自体は僕の中では評価できますが、国のトップに立つ人間の「拉致はあったが私は知らない」というような発言がとてども引っ掛かっています。そういったことを100%認め、自分が指示したと言えば立場が危うくなるかも知れないし、本当に知らないのかもし

3) 次の第四節を参照のこと。

れないから決めつけるわけにはいかないけれど、何人が死亡し、その死因や墓は洪水で流されたという北朝鮮側の言い分だけを聞いていると、どうも信じられない、信用できないというのが本心です。

これまでの日朝関係はアメリカの影響もあり、お世辞にも良好ではなかったという事実がある。そのせいで、今まで正確な情報を知ることはできなかった。その結果、なにかあれば北朝鮮がなにかしているということになっていた。そして、この前の不審船事件があった。そんなこんなで、僕は良い印象を持ってないし、信用もしづらいところがある。これから国交正常化に向けて進むのであれば、もっと信用させるように行動し、発言していく必要が、北朝鮮・金総書記にはあると思います。 三回生

(17) たしか、昨年あたりから自分もよく耳にしていました新しい中学校の歴史教科書、最近ちょっと話題になりました。けど、ほとんど忘れていました。一時はあんなにメディアに取り上げられ(たたかれ)ていたのに。冷めるのも早いね。

自分は小学校の時から歴史に興味をもっていました。日本史は高校の時には学年でもかなり上でトップにもなったことがありました(自慢じゃないが)。ある日、高校時代の日本史でトップを争っていたライバルであり中学の時から悪友であるS君に出会い、市販されていた教科書を見せてもらった。読んでみるとそんなに問題のあるような所は見当たらないし、むしろ自分が中学の時に使っていた教科書よりもいいのではないかと思った。神話がメインに入っているのは実に面白く、興味が湧いた。文字が多く、イラスト、写真は小さいが、情報量はけっこうあった。

マスコミでも取り上げられた第二次世界大戦の中での記述に関しては、特に間違ったことを書いてあるとは自分には思えなかった。そのことについては友人のS君も同様の考えをもっているようだった。やはり、マスコミやメディアの発言を安易に受け入れず、自分で調べるのは大切なことだと思った⁴⁾。 一回生

4) 同君には、いったいどちらが今日において支配的な見解かを考えてほしいこと、私(池野)はあなたの認識には異論があること、を伝えた。それから半年後に機会があって、同君に「あれから何か考えた?」と声をかけたところ、「いえ、意見は変わりません」との返事だった。そこで私は、ちょうど知人から回ってきていた、教科書問題を考える市民ネットワーク広島(日本)と日本の教科書を正す運動本部(韓国)が呼びかけた「広島県立併設型中高一貫教育校に扶桑社の教科書を採択しないよう求める日韓市民共同署名」をコピーに取って同君に渡した。署名については、予定している別稿(本稿第四節末尾参照)で詳しく紹介する。

四．拉致をめぐるゼミでの討論

パンさんの講演に関連して、ここでいわゆる「拉致」問題に言及しておかなければならないだろう。というのも、パンさんの講演後の質疑において「拉致疑惑についてどう思いますか？」という質問が出たからである。

私は、「あくまでも『疑惑』であって、それをどう思うのかというのは根拠がない問いに答えることになるが」と前置きして、「『拉致』を私は信じない。世の中に行方不明になることは数多くあるのだから、突然人が居なくなった、イコール、北朝鮮による拉致という決めつけはおかしいし、そもそも北朝鮮が『拉致』をして何の得があるのか」と答えた。その時に質問した学生にとりわけ印象的だったことは、本稿ですでに示した感想にもあるように、学生たちは日朝間に国交がないのは北朝鮮側にすべて責任があると考えていたことだった。つまり、「怪しい国家」・「テロ国家」・「独裁政権」の北朝鮮だからこそ日本と国交を結ぼうとしないのだという思い込み、というか、マスコミのキャンペーンをそのまま信じているのである。

そこで私は、日本が朝鮮を植民地とした歴史、朝鮮戦争によって分断されたこと、アメリカとの単独講和条約を結んだ日本だったからアメリカの言うなりに南の朝鮮（韓国）だけと国交を結んだこと、を話した。

また、私は北朝鮮の抱える問題についても指摘した。そもそも政権を親から子に世襲するというありようの問題である。しかし、それは北朝鮮の内部の問題であって、私たちがそれを問題とするならば、翻って、では、日本はどうか？ と問うべきなのだ。つまり、世襲がおかしいというのなら、日本の政治家のかなりの者が二世、三世であるし、アメリカのブッシュ現大統領にしても同じことが言える。そのことを認識したうえで北朝鮮のおかしさを言うのなら分かるが、そんなことは一切問題にしないで北朝鮮の世襲だけが指摘されている。マスコミ界にあってもその問題があるから、あまりそれについては論じないのである。そして、学界、財界、スポーツ界、芸能界、さらには文壇においてなど、ありとあらゆるところで、二世・三世が当たり前のようになまれているのが、今日の日本などいわゆる先進国の姿なのである。

さて、十月から始まった二〇〇二年度後期のゼミの冒頭、「先生、やっぱり、拉致やりましたよね」とその学生から声をかけられて、それをきっかけに折からの「拉致」問題について討議することとなった。私は、「拉致」があったことを全く認識できていなかったことを、まず率直に認めた。そのうえで、しかし、拉致問題が単独で論じられている問題を話した。拉致というのは許しがたい犯罪であるというのなら、どうして日本がこれまでやってきた拉致＝強制連行を語らないのか？ と。

ところが、私がゼミでの討論のための資料として用意した『朝日新聞』2002年10月3日夕刊の「素粒子」は、その点について次のように書いている――

(略) 証拠を求め、拉致実行犯全員の引き渡しを求める。出方によっては、国連の場をも使う。

9・17は、日本の四半世紀分の時を一気に揺るがした。その震えは、まだ続いている。だれも被害者・家族と全く同じ心の震えは持てないが、列島で無数の震えが共振するのを感じる。

これが、現在のマスコミの典型的な立場である。はたして、この「素粒子」氏の怒り、そして、世間の「無数の震え」は、かつての日本の植民地支配の被害者（軍属、「従軍慰安婦」、被爆者など）の訴えに耳を貸そうとしない日本政府に対しても向けられたのだろうか？ そこに自国民至上主義がある。

こうしたマスコミのありようについては、辺見庸『永遠の不服従のために』（毎日新聞社 02年）が「知識人の転向は、新聞記者、ジャーナリズムの転向から始まる」という丸山眞男のメモを切り口に次のように書いている――「基軸になる思想（土性骨でもいい）がもともとない者たちは、『転向』などしたくてもできないのである。それこそが、いまという不幸な時代のマスメディアのありようであろう。『転向』も『非転向』も廉恥もなく、裏切りもまた自他ともに感知されない。哀れといえれば哀れ、惨めといえれば、人としてこれほど惨めなことはない。激突などさらになく、論点も徐々に溶解し、無と化してしまう。表面、穏やかなこのなりゆきこそ、新しい時代のファシズムの特徴のひとつだと私は思う。」（pp.8～9）

さらに、私が用意したもうひとつの資料は、北朝鮮の拉致問題と日本の植民地支配との関連をハッキリと否定する、次のような関川夏央氏の談話である――

9月18日1面の政治部長の署名記事には「いかなる意味でも拉致は正当化できないが、そもそも日朝の不正常な関係は、北朝鮮ができる前、戦前、戦中の35年間にわたる日本による朝鮮半島の植民地支配に始まる」とある。しかし、歴史的問題と、平時にもかかわらず現在進行中のテロを並列させるのは見当違いだと思う。全被害者の生死が確認され、生存者の原状回復がなされるまで、テロは続いている。

（朝日新聞02年10月7日付「朝日新聞紙面審議会」より）

この論理には二つの混乱がある。第一に、「全被害者の生死が確認され、生存者の

原状回復がなされるまで、テロは続いている」という認識の方法そのものに異論はない。だとすれば、かつての日本の植民地支配の「全被害者の生死が確認され、生存者の原状回復」は関川氏にあってはどう実現しているというのであろうか？ そして、第二に、どうして、日本の植民地支配という「歴史的問題と、平時にもかかわらず現在進行中のテロを並列させるのは見当違い」なのであろうか？

こうしたことをゼミで話し合ったので、ゼミのある学生は自分で「新しい教科書をつくる会」などの勢力を称賛する本を読み、それを私に一度読んでみては？ と差し出した。限られた時間を思えば私が読むことはあり得ないのだが、今回はゼミでの討論の関係からとにかく学生からその本を受け取ることにした。そして、一週間経って明日はゼミがあることからとりあえずその本を手にし、みんなにもとにかく読んでもらおうと思って同書からの抜粋を作り、ゼミで討論した（これについては、別稿「拉致問題をめぐってのゼミ」を準備中である）。

五．学生の感想を読んだパンさんからの手紙

本稿を終えるにあたり、パンさんの講演を聞いた学生たちの感想（本稿第三節）を読んだパンさんからいただいた手紙を示しておく――、

こんにちわ。長いことご無沙汰してすみません。テープおこしの校正もすっかり時間がかかってしまって申し訳ないです。お変わりないでしょうか。(略)

いやなこと、恐ろしいことが次々起こります。戦争が起こるなんて、ちょっと前まではあんまり真剣に考えてなかったんですが……。

反戦運動が盛り上がり、若者たちも声を上げるようになったことを嬉しいナー、希望が持てるナーと思って帰った夜、そのことを友人にメールで知らせました。家内工業で土曜日遅くまで仕事している彼女は、「こんなときに仕事ばかりしてる自分が恥ずかしい」と言うのです。私のほうが恥ずかしくなりました。小さい子どもがいるのに人員削減で週一回は夜勤をすることになり、その日は朝九時に出て翌日の夕方五時まで働いて帰るという友人、いつ首になるかわからず言いたいことも言えず働いている人たち、JRがしょっちゅう人身事故でストップする事実！私の生活のすぐそばでこんなに踏みつけられている人がいるんだということに愕然とします。殺人が行なわれているのは戦場だけじゃないという気がします。

さて、みなさんの感想を読んで、嬉しかったです。言いたいことがいっぱいあるのに、うまく表現できず、ちゃんと伝わったかどうか心配だったんですが、ちゃんと受け止め、自分の問題として考えてくれた学生のみなさんに感謝したいです。

北朝鮮の問題についてもあまりに一方的な報道ばかりなので、「鵜呑みにしていいんだらうか」とちょっと立ち止まって考えてくれるきっかけになったら嬉しいです。「慰安婦」のことも在日朝鮮人のこともはじめて知った人もいたと思うのですが、立ち止まって考えるきっかけになってくれたらそれで充分です。こういう機会を与えてくれた池野さんにあらためて感謝します。

もちろん、違う意見や反発もあるでしょう。北朝鮮のあり方についてもいろんな意見があるのは当然です。私の周りでもいろんな意見があります。ただ、問題があったとしても互いに話し合い、和解していくことが人間の叡知です。暴力で弱いものを蹴散らすようなやり方が許されていいはずはないですよ。拉致被害者の方が外務省に「北朝鮮に経済制裁を」と頼みに行ったニュースを私は在日朝鮮人としてではなく、人間として悲しく思いました。今も食料難で多くの人が飢えています。新聞の「日本フォスタープラン協会」の広告の「子どもが苦しんでいる。どこの国の人間が助けてもいいじゃないか」という言葉を目にするたびに、「子どもが苦しんでいる。どこの国の子どもだって助けていいじゃないか」と思うのです。なぜ北朝鮮の子どもを助けてはダメなの？ 戦場に無理やり連れて行かれ性の奴隷にされた人たちと拉致被害に遇った人たちとは命の重さが違うの???

と最後は愚痴になりました……。

追伸：「ボウリング・フォー・コロンバイン」見ましたよね。今、会う人会う人に宣伝しているんですが……。マイケル監督のメッセージ⁵⁾、読んでください！

パン・チョンジャでした。

2003.4.17

5) アカデミー賞ドキュメンタリー賞を獲得した映画『ボウリング・フォー・コロンバイン』の監督マイケル・ムーアのメール・コピーが手紙に同封されていた。これに関連するものとして、氏のアカデミー賞授章式でのブッシュ批判の記事が氏の写真入りで朝日新聞03年3月25日にある（「アカデミー賞授章式 戦争色濃く参戦是非巡り応酬も」）。なお、同監督の他のドキュメンタリーに、氏の生まれたフリント市（GM城下町）でのGMの大量解雇をテーマにした『ロジャー&ミー』がある。また、最近の著作として『アホでマヌケなアメリカ白人』（松田和也訳 柏書房 03年）がある。